



Title	教員研修留学生の留学効果について：帰国後のインタビューを中心に
Author(s)	永井, 智香子
Citation	長崎大学留学生センター紀要. vol.11, p.91-103; 2003
Issue Date	2003-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/5599
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-20T22:33:16Z

教員研修留学生の留学効果について

—— 帰国後のインタビューを中心に ——

永井 智香子

1. はじめに

教員研修留学生は海外の初等中等教育機関の現職教員等を対象とした大学院レベルの国費外国人留学生プログラムの一つで、1980年に創設された。以来、世界26カ国から毎年155名が来日し、半年間の日本語の予備教育の後、教員養成系大学や教育学部等で1年間の研修を受けている。

長崎大学でも1983年に教員研修留学生の受け入れが始まっており、2002年度までに13か国から来日した55名が研修を終え帰国している。1年半の研修を終えた元教員研修留学生は帰国後ふたたび教員として働くわけであるが、筆者は1年半の日本での留学は帰国後の教師としての仕事に具体的にどのような効果をもたらすのか、さらに教師の異文化体験はその周囲の人たち、すなわち、生徒や同僚にどのような影響を及ぼすのかなどということに興味を持ち、インタビューを試みた。

インタビューを実施したのはラテンアメリカからの元教員研修留学生3名と多くはないが、インタビューから具体的な留学効果の例が得られた。

2. 先行研究

教員研修留学生に関する先行研究はその多くが日本での研修のあり方等を問うものであり、帰国後の留学効果についてのものは少ない。帰国後の追跡調査としては佐橋（1989）がある。佐橋らはマレーシア、フィリピンを訪問し、元教員研修留学生9名、研究留学生1名に面接を行い、さまざまな角度からの質問を行っている。その中から教員としての留学効果に関するものを抜き出すと、マレーシアで「教員として大いに役に立つ」とした者は具体的には「専門分野で新しいことを数多く学べた」「自分の日々の勤務を反省する機会を与えてくれた。日本の急激な発展が、日本人々の日常的な勤勉さによって支えられていることが判った」「学位論文の一部になった」「日本の教科書の翻訳をやった」

と述べたとのことである。フィリピンでは「母国へ帰ってからプロモートされた」「学校の中の管理・運営委員会のメンバーに選ばれた」「教員の中の指導的立場に立つことになった」「学校現場から、より研究的かつ指導的な立場の職に移れた」などと述べたという。つまり、新しい知識が得られたり、学位を取るのに役に立ったり、より重要な地位につけたり、昇進したりして、教員として留学は役に立ったということである。

筆者はさらにその先のこと、より具体的なことを知りたいと考えた。たとえば、日本で新しく学んだことが一体現場で具体的にどのように生かされたのか、昇進したりより重要な地位につけたことにより、どういうことを実践したのかなどである。そこで、インタビューを試みることにした。

3. インタビューについて

インタビューを試みたのは元教員研修留学生の3名である（以下「A氏」「B氏」「C氏」と呼ぶ）。インタビューの回数、時期などはそれぞれ異なるので、一人一人別々に結果を報告したいと思う。A氏とB氏には約2年の期間を置いて2度、C氏には1度インタビューを行った。筆者は2000年と2002年にラテンアメリカの国に滞在する機会があり、その際に元教員研修留学生と連絡をとり、インタビューを実施した。ただし、A氏の1度目のインタビューは長崎で帰国直前に行った。インタビューは基本的にスペイン語で行い、平均的な1回のインタビューの長さは30分から1時間であった。共通の質問項目は以下のようであった。

質問項目1：なぜ日本の教員研修プログラムに参加しようと思ったか。日本で何を学びたいと思ったのか。

質問項目2：日本への留学は帰国後教員として効果的であったか。効果的であった場合、それは具体的にどのようなことか。

質問項目3：日本への留学は一教師として、一個人としてあなたにどのような影響を与えているか。日本へ行く前と行ったあとで一教師として一個人として何か変わったことがあるか。

質問項目4：将来の夢は何か。

インタビューは全て許可を得て録音した。録音したものを日本語に書き起こし資料とした。インタビューをした3名の元教員研修留学生の日本への留学時期と来日前の教員としての職歴は以下の通りである。

A氏：2000年10月に来日した。来日前、中学校の自然科学の教師であった。

B氏：1998年10月に来日した。来日前、全校生徒が126人という小さい村の小学校の教師であった。

C氏：1998年10月に来日した。来日前は午前中は小学校の教師、午後は教員養成校で働いていた。

4. インタビューの内容

4-1 A氏へのインタビューから

A氏への第1回目のインタビュー：帰国を間近に控えた2002年3月に実施した。

目的達成について

問い：日本へ来る前にどんなことをしたいと思っていましたか。

A氏：勉強したいことがたくさんありました。たとえば、自然科学のさまざまな実験をする力をつけたいということ、それから、日本の中学校では自然科学がどのように教えられているかを知りたかったです。さらに科学技術博物館、植物園、動物園、プラネタリウムなどを訪問することです。どうしてかというところらの場所は人間社会の中で重要な役割を果たしているからです。

問い：全部の目的を果たすことができましたか。

A氏：最初から全部は無理だということを知っていました。たとえば、環境関係の研究室をたずねて、環境汚染を軽減するためのエネルギーについて学びたかったです。それから、母国の中学に植物園をつくるプロジェクトを立ち上げたかったです。ただ、これは完全に夢だけに終わったわけではありません。植物園をたずねましたし、写真もアイデアもあります。でも、プロジェクトを立ち上げることはできませんでした。

いちばん印象的だったこと

問い：この1年半でいちばん印象的だったことは何ですか。

A氏：大学で最初にした化学の実験です。銅の化学変化の実験です。先生に前もって資料をもらい、研究室のYさんにふりがなをふってもらい予習しておいたので、実験当日にはもうその資料をしっかりと読んでいました。その実験は面白かったです。銅の粉が一連の実験によってどんどん変わっていくというものでした。この一つの実験から私は帰国後少なくとも10の小さい実験ができます。

問：帰国後その実験をしてみますか。

A氏：はい、仲間と一緒にやってみたいです。もう一つは蒸留の実験です。すごくシンプルな実験で、どこでも、どんな材料を使ってでもできる面白い実験です。

一人の教師として変わったこと

問：ひとりの教師として何かかわりましたか。

A氏：ほかの生き方、ほかの人生観があることを学びました。私の世界観、視野は広くなりました。このことは私の生徒たちに、そして、娘や息子、甥や姪にも伝えたいと思います。

問：どうやって伝えますか。

A氏：まずはじめは私の経験を話したり、写真やビデオを見せることを通じて、世界はどんなに美しく、世界はいつでもだれでも受け入れてくれていて、いつも開かれていることを伝えたいです。もちろん、落ち込んだ経験、反省したこと、孤独感、くよくよしたことも全部伝えます。

A氏への第2回目のインタビュー：帰国後約半年たった2002年9月に実施した。 帰国後日本で学んだことを伝えたか

問：帰国後教師としてどうですか。

A氏：まだ、長崎大学で学んだ実験はひとつもしていません。

問：どうしてですか。

A氏：どうしてかということ、私の国の教育プログラムの中にそのようなものを組み込むような体制ができていないからです。そのような体制ができることは期待されています。ただ、ひとつだけ、教室でできる簡単な実験をやってみました。生徒たちはみんな興味を持ち、実験をすることは説明だけするより教育効果があることがわかりました。実際に身近にいる同僚や上司は、私が日本から持って帰ってきたものをどのように活用したらいいかわからないようです。

問：具体的にはどういうことですか。

A氏：教育プログラムの中に組み込む余地がないのです。ただ、最小限のことはしました。同僚の協力を得て、実験を通して理科をどのように教えるかという教授法について州の教師の集まりで発表しました。たくさんの質問を受け、反響も大きかったです。多くの参加者が私が日本で作ったスペイン語で書いた

報告書をほしいと言いました。でも、今の段階ではもっとたくさんの方ができたはず。同僚たちからももっと関心を持ってほしかったし、共同で何かしようと提案もしてほしかったです。

留学で実感したこと

問い：生徒たちにどんな影響を与えることができると思いますか。

A氏：日本はすごく進んだ国であるのに比べ、私の国はまだ発展途上の国です。しかし、私が長崎での経験から達した結論は生徒たちに科学的なものの見方、論法のたてかた、科学的な創造性などを身につけさせるのは、教師の授業の工夫次第だということです。世界中どこの国においても科学は科学なのです。言葉が通じなくても科学の世界は化学記号でわかりあえるということです。そのことは化学の実験をしているときに気づきました。

銅がどのように化学反応により変化するかという実験を教えてくださいました先生は英語が少ししか話せなかったので、うまくコミュニケーションができませんでした。困った私は先生に「化学反応式を書いてください」といいました。私は先生が書いてくださった化学反応式を見て、何についての実験かよくわかりました。化学反応式を通じて理解し合えるということで互いに喜びました。つまり、化学記号や植物の学名はどこの国でも同じなのです。世界中どこの国の子どもであっても興味を持たせ、理解させることができる可能性があるということです。私の国の子供たちも日本の子供たちと同じように科学を学ぶ可能性があるのです。そして、将来私の国も先進国の仲間入りができるだろうと思います。

校長になる

問い：校長になるための試験を受けたそうですが、校長になれたらどのような学校の校長になりたいですか。やはり大きい学校がいいですか。

A氏：学校の規模は私にとって大切なことではありません。たぶん、最初は経験をつむために、よりよい仕事をするために小さい学校のほうがいいです。ただ、一つ残念だったことは日本から持ってきたいろいろな書類（修了報告書を含む）は評価されたけど試験ではカウントされなかったということです。やはり、カウントされるには修士号や博士号でなければならないのです。

問い：校長になれたら校長としてどんなことをしたいですか。

A氏：頭の中にこういう学校を作りたいというモデルがあります。今働いている学校とは違います。校長になるということはそのような学校を作るチャンスだと思います。もちろん、経済的な問題もあります。でも、これはチャンスです。教師仲間の協力を得て学校を作りたいと思います。

問い：その夢は日本に行く前からありましたか。

A氏：それは日々、年々膨らんできた夢です。だんだん強くなって来ました。日本へ行ってからももちろんその夢は強くなりました。でも、日本の教育をそのまま模倣したいとは思いません。日本の教育に対して批判したい部分もあります。でも、日本でのたくさんの経験の積み重ねは確実に夢を現実へと近づけました。

とにかく、生徒達が学校へ行くのが好きになるような学校にしたいです。理科のクラスの教室にはテープレコーダー、スピーカー、テレビ、ビデオがあって、生徒たちが調べものをしている間はバックグラウンドミュージックを流したり、壁にはボードがあって、生徒が調査した結果が貼ってあったり、植物や毎日観察できる実験装置がおいてあったり……、その教室に足を踏み入れると喜びを感じられるような教室であればいいです。生徒が緊張するのではなく、リラックスできるような教室であればいいです。

4-2 B氏へのインタビューから

B氏への第1回目のインタビュー：帰国後半年にあたる2000年9月に実施した。B氏は日本からの帰国後、短期間ではあったが、アメリカに住むB氏の国の移民の子供達にB氏の国の言葉と文化を教えるために政府から派遣され、帰国して間もないときのインタビューであった。

日本で学んだことは効果的だったか

問い：今、帰国して田舎の小学校で働いているわけですが、日本で学んだことは効果的でしたか。

B氏：長崎大学で学んだことや調べたことは当然のことながら、私にとってその多くは知らなかったことです。今、学んだことを試しているところです。もちろんうまくいっています。

問い：どのように。

B氏：たとえば、付属小学校で1年生から6年生までの算数のクラスを見学し

ました。それらのクラスですごく面白いゲームのようなものを見ました。そのゲームというのはみんな参加できるものであるし、そのゲームを通じてそれまでにその子供がもっていた知識がどういうものであったかを振り返ることができるものでした。そのようにして見たゲームを実際に子供たちに実践しています。子供たちはものすごくゲームが好きです。

問い：今、職場で日本の紹介をしますか。

B氏：帰国後、週に1回異文化理解のクラスを始めました。このクラスは日本のことを話すことから始めました。このような田舎の小さい小学校では外国のことを想像することが難しいようです。どこにあるかとか、どんな国だとか、そこで、私は写真、ビデオ、雑誌、新聞のような視聴覚にうったえる教材がありますから、それらのものを使うと子供たちはすごく興味を持ちます。

問い：具体的にはどのように授業を進めますか。

B氏：まず、長崎についてのビデオを見せます。長崎についてちょっと知ってもらうためです。それから、地球儀で日本がどこにあるかを示します。そして、時差のことを説明するのですが、子供たちには日本が昼間のとき、ここが夜だということが考えられないようです。子供たちの興味は今日本に集中しています。もう1から10まで日本語で数えられます。これはすばらしいことですね。

個人としての変化

問い：日本に行く前と今では何かが変わりましたか。

B氏：はい、まず、私は自分の国を前とは違った見方をするようになりました。ほかの国に住んで、自分の国を外から見るという機会は私の行動を変えました。

問い：たとえば、どういうことですか。

B氏：たとえば、日本で大学院に行きたいです。今は勉強を続けています。前に進むために、また、他の国に行くために……。私の目標はより高くなっている。より高いところに行くにはより勉強することが必要です。いつも突き進むことを望んでいます。

B氏への第2回目のインタビュー：帰国後約2年半にあたる2002年9月に実施した。

1回目のインタビューから2回目のインタビューの間にB氏はスペイン語の教師としてフランスに約1年にわたって滞在した。そして、インタビュー時、

B氏は小学校の教師ではなく DEPARTAMENTO DE EDUCACION NORMAL (以下DENと呼ぶ。日本の県の教育委員会に相当する)で教師のための英語研修プログラムを担当しはじめて間もない時であった。

日本留学の効果

問い：留学はあなたの仕事にどのような影響を与えましたか。

B氏：日本で小学校や中学校を訪問して自分の国を紹介した経験は日本の子供達に世界の扉を一つ開ける役割を果たしたと思います。自分たち外国人と直接の交流を通じて日本の子供たちは外国のことを学んだと思います。だから、私は帰国後日本人が私を訪ねて来たら、出来る限り自分の勤める田舎の小学校に連れて行くことにしていました。それは私の子供たちにはまた違った形で、日本を学ぶチャンスになります。訪問してきた外国人を通して学ぶのです。これは疑いもなくすばらしいことです。一度は日本大使館の文化担当官を招きました。私はそういうことができたからちょっと得意でした。それから、日本人学校の校長先生、日本語学校の先生たちも来てくれました。これは私の学校の子供たちにとってはすばらしい経験です。私の生徒たちだけではなく、学校にとっても村にとってもすばらしい経験になりました。

問い：それは日本に行ったからできたことですか。

B氏：はい、そうです。ほかにも、自分の経験を教師仲間に話す機会がありました。英語や何か興味を持って勉強することは、外国へ出るチャンスにつながる、そして、国を出て、外国に生活して、生でその人たちと接したり、その文化を肌で感じるができると話しました。私の話をきいて触発された教師仲間が3人います。一人は今、広島にいるし、もう一人は大阪に行くことが決まっています。残念ながら、あとの一人は試験にパスすることができませんでした。このように、自分の話に影響を受け、教師仲間が日本に行くことができるということ、これも日本へ留学したからこそできたことで、誇りに思っています。

アメリカへスペイン語と自国の文化を教えにいったこと

問い：アメリカへ行ったのは日本へ行く前からの計画でしたか。

B氏：いいえ、日本から帰ってからアメリカに住む自分の国の移民にスペイン語を教えることに興味を持ちました。

問い：それはどうしてですか。

B氏：どうしてかというとな新しい文化をアメリカで作り上げようとしている移民の子供たちに教えることに興味を持ちました。私は日本に行く前は自分の国の文化をあまり評価できませんでした。自分の国を外から見て、帰国後文化的なイベントを見て感動しました。自分の国はすごい文化を持っていると改めて思ったのです。そこで、アメリカで生まれた自分の国の血を持っている子供たちにあなたのご両親の国はこうですよと教えることはとっても意味があることだと思ったのです。習慣、歴史、ダンスを教えました。それから歴史的建造物があるところについても説明しました。それから、アメリカに行って、少し英語に自信がつかしました。

昇進

問い：どうして今は小学校の教師ではなく、DEN で働いているのですか。

B氏：それは自分にとっては昇進だったからです。DEN へ来て、教育関係の調査をするグループに入らないか、そして、教育現場での教師に対する英語のプログラムをコーディネートする仕事をしないかという誘いを受けました。新しい仕事を与えられて、今のところは非常に興味深いと思っています。

夢

問い：夢は何ですか。

B氏：日本で大学院に行くことです。

問い：どうして日本ですか。

B氏：日本が一番好きだからです。たとえば、一緒に日本へ行った仲間は、国で修士課程を終えようとしている人もいるし、ほかにも今修士課程の学生になっている人もいます。

問い：みんな日本に行ったことがきっかけとなってもっと勉強してみたいと思うようになるのですか。

B氏：はい、必要性を感じるのです。日本にいる間に自分には足りないものがたくさんあることに気づくのです。

問い：たとえば、どんなことですか。

B氏：たとえば、日本では、芸術としての音楽教育を非常に大切にしています。そして、小さいときから音楽を勉強します。私の国は違います。とにかく、ずっ

と勉強しつづけていたら、そしたら、もっともっと前へ進みたくなるのです。とまりたくないのです。

4-3 C氏へのインタビューから

C氏へのインタビュー：帰国後約半年にあたる2000年9月にインタビューを実施した。

何を勉強したのか

問い：どうして日本に行きたいと思いましたか。

C氏：ここで、東京の教育研究所の人が日本の教育システムについて話す講演会があったのです。そして日本の教育システムについてもっと深く知りたいと思うようになりました。

問い：日本の大学で実際に何を勉強しましたか。

C氏：教員になりたい学生は何をどのくらい勉強するのかということです。どんな教材を使って勉強するのか、実習はどうなっているのかということです。何回も学校を訪問しました。付属の養護学校も訪問しました。

問い：学校訪問はどうでしたか。

C氏：すごく面白いと思いました。見学して、私の国と教育システムとずいぶん違うことがわかりました。先生たちの働くタイムスケジュールも違います。それから、道徳のクラスがあることも面白いと思いました。私の国には公民教育はありますが、これは日本の道徳とは違います。日本の道徳教育は気に入りました。理科のクラスは私の国のやり方とはずいぶん違って面白かったです。それから、音楽のクラスでは、日本の子供たちは演奏することを習います。私の国では芸術のクラスはあるけど、演奏は習いません。とにかく、授業見学は面白かったです。

日本留学の仕事への影響

問い：日本での経験は現在のあなたの仕事にどのように影響していますか。

C氏：すごく有益です。今私が仕事をしていく上において、日本で経験したことを常に念頭においています。

問い：たとえばどういうことですか。

C氏：授業の計画を立てるときは日本で行われているようにきっちりと計画を

立てるようになりました。日本の先生たちは教案をしっかりと立てます。それはとってもいいことです。私もそうしなければと思うようになりました。

それから、教育実習です。私の国にも教育実習はありますが、実習が終わったあと、日本では先生と集まります。そして、先生は一人一人にコメントをして、いろいろなアドバイスをします。私の国では日本のように丁寧ではありません。このことはとってもいいことだと思い、私の国でもやろうと思っています。

5. インタビューから見えてきたこと

今回インタビューをした3人とも、それぞれ内容は違うが、日本へ留学したことにより、教師として、また、一人の個人として日本で学び取ったことことを実践しながら積極的に前に進もうとしていることがうかがえる。

A氏は帰国後、日本で学んだことを十分に生かせる体制が国にはないことを実感し、それならば、その体制を自分で作ろうと校長になるという道を選んだ。事実、A氏は2003年4月現在、全校生徒が452人、教員が22人いる中学校の校長である。現在、校長としてどのような学校作りを実践しているのだろうか、興味深い。

B氏の“日本にいる間に自分には足りないものがたくさんあることに気づく”という言葉が印象的である。B氏は日本から帰国後2度にわたって外国で働き、また、B氏の日本留学の同期の中には大学院に進んだものも少なからずいるという。これらの元教員研修留学生が積極的に前に進もうとしている原動力はこのB氏の言葉に代表されているような気がする。

C氏へのインタビューからはC氏にとって、日本の教員養成システムが非常に興味深かったことがうかがえる。C氏の言葉から現場の教員だけではなく、教員養成に携わる者が、外国に留学することも非常に意味があるということがわかる。

元教員研修留学生が帰国後教育現場で日本で学んできたことを実践・活用する方法には大きくわけて四つあるように思う。一つは元教育研修留学生自らが生徒に直接日本での体験を話したり、学んで来たことを実践するというものである。二つ目は教員研修会のような教員のFDの場で日本で学んできたことを発表するというものである。三つ目は他の教員にも留学を薦めるということである。四つ目は日本で学んできたことがその元教員研修留学生の所属する学校

の教育システムの改善につながるというものである。

これらの四つの実践活用例の一つ目から3つ目までの具体例が今回のインタビューから得られた。しかし、四つ目の教員研修留学生が帰国後元の職場の教育システムに大なり小なりの変化を与えたという具体例は得られなかった。そのような例があれば、それは一人の教師の留学効果がしっかりと教育現場にシステム化されて根付いたと言えるであろう。今後、元教員研修留学生にインタビューをする機会があれば、そのような具体例が得られることを期待している。

終わりに

どの元教員研修留学生もインタビューの依頼をすると、快く応じてくれた。日本滞在中は学生として接していたが、現場で教員として働く彼らを見るとずいぶん印象が違い、逞しく見えた。当然のことであるが、あらためて「教員だったのだ」と実感させられもした。

今回のインタビューはラテンアメリカの国で行った。他の国の元教員研修留学生にインタビューをしてみると、また違った留学効果が見えてくるかもしれない。

最後にスペイン語で行ったインタビューを日本語に翻訳する際、長崎外国語大学の田村美代子助教授に手伝っていただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

注

1) たとえば、次のようなものがある。

橋本健夫・尹仁子 (1993) 「教員研修留学生の研修内容と方法の改善に関する研究」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』24 pp77-92

難波康治・新矢麻紀子・中山亜紀子、浜田麻里、林洋子・三登由利子 (2001) 「教員研修留学生に対する追跡調査報告」『多文化社会と留学生交流』5 pp161~176

中山亜紀子・難波康治 (2003) 「教員研修留学生の受け入れ体制に関する調査報告」『多文化社会と留学生交流』7 pp77~88

参考文献

佐橋 謙 (1989) 「岡山大学から帰国した留学生の現状調査」『岡山大学教育学部研究集録』 80 pp49～59